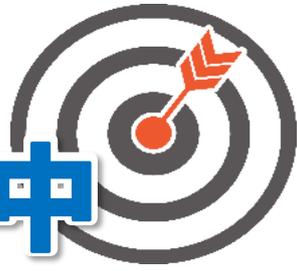


2022 ズバリ! 的中



古文

名古屋大学

出典が同じ (以下河合塾教材は国公立大古文のみ掲載)

入試問題

前期日程
古文 二

河合塾

大学受験科 基礎シリーズ
国公立大古文 第八講 A[15]
大学受験科 完成シリーズ
トップレベル古文論述 第九講 [17]

歌の、八の病の中に、後悔の病といふやまひあり。歌、すみやかに詠み出だして、人にも語り、書きても出だして、後に、よきことは、節を思ひよけて、かくいはずなど思ひて、悔いねたがをいふなり。さればなほ、歌を詠まむには、急ぐべきがよきなり。いまだ、昔より、とく詠めるにかしこきことなし。されば、貫之などは、歌ひとつを、十日二十日などにこと詠みけれ。しかはあれど、折にしたがひ、ことにぞよるべき。

(△大江山生野のさとの遠ければふみもまだ見すあまの橋立)

これは、小式部の内侍といへる人の歌なり。ことの起りには、小式部の内侍は、和泉式部がすめなり。親の式部が、保昌が妻にて、丹後に下りたりけるほどに、都に、歌合のありけるに、小式部の内侍、歌よみにとられて詠みけるほど、四条中納言定頼といへるは、四条大納言の子なり。その人の、たはぶれて、小式部の内侍のありけるに、「丹後へつかはしけむ人は、帰りまうで来にけむや。いかに心もとなくおほすらむと、ねたがらせむと申しかけて、立ちければ、内侍、御簾よりなら出でて、わづかに、直衣の袖をひかへて、この歌を詠みかければ、いかにかかやうはあつて、ついで、この歌の返しせむとて、しばしは思ひけれど、え思ひ得ざりければ、ひきはり逃げにけり。これを思へば、心とく詠めるもめでたし。道信の中將の、山吹の花をもちて、上の御局といへる所を、すまひけるに、女房達、あまたこほれて、「さるめでたき物を持ちて、ただに過ぐるやうやある。」と言ひかけたりければ、もとよりやまうけたりけむ、

(A) 口なしにちしほやちしほ染めてけり

とひひて、さし入れりければ、若き人々、え取らざりければ、おくに、伊勢大輔がさぶらひけるを、「あれとれと宮の仰せられければ、うけ給ひて、一間がほどを、あざり出でけるに、思ひよけて、

(C) こはえもいはぬ花の色かな

とこそ、付けたりけれ。これを、上聞こし召して、「大輔なからましかば、恥がましかりけることかな」とぞ、仰せられける。これらを思へば、心ときも、かしこきことなり。心とく歌を詠める人は、なかなか、久しく思へば、あしう詠まるるなり。心おそく詠み出だす人は、すみやかに詠まむとするもかなはず。ただ、もとの心はへにしたがひて、詠み出だすべきなり。

三 次の文章は、「後頼髄腦」の一節による。これを読んで、後の問に答えよ。

(15) A 次の記事を読んで、後の設問に答えよ。

道信*の中將の山吹の花を持ちて、上の御局といへる所を過ぎけるに、女房たちあまた居こほれて、「さる⁽¹⁾めでたき物を持ちて、ただに過ぐるやうやある。」と言ひかけたりければ、もとよりやまうけたりけむ、

(A) 口なしにちしほやちしほ染めてけり

と言ひてさし入れたりければ、若き人々え取らざりければ、おくに伊勢大輔が⁽⁵⁾さぶらひけるを、「あれ取れ。」と宮の仰せられければ、うけ給ひて、一間が程をあざり出でけるに、思ひよけて、

(B) こはえも言はぬ花の色かな

とこそつけたりけれ。これを上きこしめして、「大輔なからましかば、恥がましかりける事かな。」とぞ仰せられる。

これらを思へば、心ときもかしこき事なり。心とく歌をよめる人は、なかなか久しく思へば、あしう詠ま⁽⁷⁾るるなり。心おそく詠み出だす人は、すみやかに詠まむとするもかなはず。ただ、もとの心はへにしたがひて、詠み出だすべきなり。

(源後頼の「後頼髄腦」による)

- (出題校) 防衛大
- (重要語句)
- あまた
 - 居る
 - さる
 - めでたし
 - ただなり
 - まうく
 - さぶらふ
 - 仰す
 - 給ふ
 - 程
 - みざる
 - 思ひよる
 - えも言はず
 - きこしめす
 - 心とし
 - かしこし
 - なかなかなり
 - あし
 - 心はへ